

## シェイクスピアに関わった2人のジョンソン

清水 実和

シェイクスピアは没後に2人のジョンソンから重要な批評を受けます。もちろん彼はこのことを知らない訳ですが、この批評は後の世のシェイクスピアの研究に大きな影響を与えることになりました。

1人は17世紀のイギリスの劇作家で桂冠詩人のベン・ジョンソン (1572-1637) です。彼は古典に関して深い学識があり、宮廷仮面劇の第一人者としてシェイクスピアと同時期に活躍しました。彼はシェイクスピアの友人でもあり、シェイクスピアの没後7年目に刊行されたシェイクスピアの戯曲全集では追悼詩を献じました。その中でシェイクスピアの想像力や表現力を称賛しつつ、古典の知識や技術についてはこう述べています。

「彼は一時代の人でなく、万世に生きる詩人である。ラテン語は少ししか知らず、ギリシャ語はもっと知らぬとしても、自然の女神自身彼が作ったものを誇りに思った。」(荒井良雄 他編『シェイクスピア大事典』より)  
この語学に関する記述はシェイクスピアを知る重要な手掛りとなり、これにより研究者たちの間ではシェイクスピアの語学力について議論が起きました。



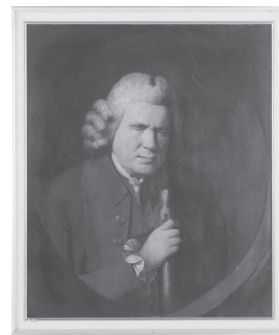
Mr. William Shakespeares comedies, histories, and tragedies [First Folio]. London, 1623.

(『戯曲全集—ファースト・フォリオ』より  
ベン・ジョンソンの追悼詩) —本学図書館所蔵—

もう1人はイギリスの文学者・詩人・批評家で、18世紀を代表する辞書の編纂家のサミュ

エル・ジョンソン (1709-1784) です。彼は辞書編纂者としての知識と経験から、自身が編纂したシェイクスピア全集の難解語句に簡潔な解釈を与えてすぐれた脚注を残しました。サミュエルは自身のシェイクスピア全集の編纂にあたり、序文でこう述べています。

「英語の歴史や英語の持つ本質的な力は作者の原文をそのまま残すことによつてのみ保つことができる」(サミュエル・ジョンソン著、中川誠訳『シェイクスピア序説』より)  
この時代多くの編纂者が自身が編纂したシェイクスピア全集に独自の改編を行っていたなか、サミュエルは古い版本を評価し原文をなるべく尊重して編纂するべきだという見解を示しました。これは後の編纂者へと引き継がれていきました。



サミュエル・ジョンソン肖像画 (作者不明)  
—本学図書館所蔵—

シェイクスピアの作品は彼の没後も現代に至るまで、様々な時代や国の人々に愛され批評され、後世の文学や演劇にも多大な影響を及ぼしています。また、作品に出てくる登場人物の行動や発言には、誰しものが持っている人間の普遍的な性質が見事に描かれています。みなさんも芸術の秋に文学や音楽、演劇などを通してシェイクスピア作品にふれてみてはいかがでしょうか。

しみず みわ (非常勤職員)